漢語の四字畳語の構造・機能等について

譙　　燕

はじめに

山田孝雄『日本文法学概論』には和語の合成語の組織について以下のような説明がある。「一は同じ語を重ねて一としたるものにしてこれを畳語といひ，他は異なる語を合せて一とせるものにして，これを熟語といふ[①]」。本文ではこの概念を広義に取り，異語の結合の中に存在する同語（同音語も含む）の重用を問題にし，特に漢語の四字畳語を語構成，文法機能，意味変化などの面から具体的用例[②]の分析と共に考えていきたい。

四字畳語には古い時代から存在したものが多い。中国最初の詩集『詩経』に「兢兢業業」，日本の『祝詞』に「所所方方」などが見られ，仏教用語の中にも「生生世世，空空寂寂」のような畳語化されたものが少なくない。

一．語構成

1．畳語の分類

先ず，『広辞苑』（第4版）『新編大言海』『新明解四字熟語辞典』に挙げられている四字畳語（見かけ上のものも含む）を型別に分類し，考察を加えたい。語の記述は主に『広辞苑』によるが，それ以外の辞書も参考にする。

a．二字単語ABがAABB型に重複されたもの。

唯唯諾諾　奇奇怪怪　貴貴重重　奇奇妙妙　虚虚実実　空空寂寂
空空漠漠　磊磊落落　言言句句　恍恍惚惚　個個別別　渾渾沌沌
三三五五　時時刻刻　子子孫孫　事事物物　洒洒落落　凄凄切切
是是非非　戦戦慄慄　蹌蹌踉踉　朝朝暮暮　年年歳歳　万万千千
平平坦坦　平平凡凡　明明白白　来来世世

この類の畳語はその原型（重複される前の形）がすべて意味を持ち，類義又は対義の要素からなる語の重複がほとんどを占めるが，中には「来来世世」のように前の要素が後の要素を修飾する例も見られる。

b．畳語同士 AA と BB が組み合わせられて，AABB 型の畳語となるもの。

郁郁青青　陰陰滅滅　殷殷硠硠　鬱鬱怏怏　鬱鬱葱葱　鬱鬱勃勃

赫赫明明　侃侃諤諤　熙熙攘攘　汲汲忙忙　兢兢業業　皎皎晶晶

喧喧諤諤　皎皎冽冽　喧喧囂囂　在在所所　孜孜忽忽　処処方方

生生世世　正正堂堂　戦戦兢兢　喋喋喃喃　亭亭皎皎　滔滔汨汨

念念刻刻　漠漠濛濛　飄飄踉踉　忙忙碌碌　溶溶漾漾　寥寥冥冥

林林総総　縷縷綿綿　悠悠閑閑　悠悠舒舒　巍巍堂堂　滞滞泥泥

この類はすべて類義語の組み合わせである。

「戦戦兢兢」「侃侃諤諤」「鬱鬱葱葱」には AB 型の「戦兢」「侃諤」「鬱葱」が見出し語としても挙げられているが，「戦兢」は「戦戦兢兢の略」と『広辞苑』は明記しており，「侃諤」の場合は，「侃侃」と「諤諤」それぞれに中国の古典に用例があり，「侃侃諤諤」も後代の文献の例がある。

『論語・郷黨』に

「朝與下大夫言，侃侃如也，與上大夫言，誾誾如也。」とあり，

『史記・商君傳』に

「千人之諾諾，不如一士之諤諤」とある。

また，清代の『隋唐演義』には

「朝中有剛正大臣，侃侃諤諤，不畏強禦」と「侃侃諤諤」の例が見られる。

『広辞苑』には「剛直で言を曲げないこと。遠慮することなく議論すること。侃侃諤諤」として解されているが，『新編大言海』には「侃侃諤諤の略」と明確に記述されているので，この類に属するものと見ておく。

「鬱葱」については，『大漢和辞典』が次のような変遷の流れを示しているので，「鬱鬱葱葱」の略語としてとらえるのが適当であろう。即ち，

〔後漢書，光武紀論〕に

氣佳哉，鬱鬱葱葱然。

〔楊烱，和輔先入昊天觀星瞻詩〕に

天門開奕奕，佳氣鬱葱葱。

〔邢居實，南征賦〕に

佳氣鬱葱而如在。

とある。

現代中国語にも AABB 型の単語が略されて ABB 型になるものがあるが，さらに AB 型に縮略された例は見当たらない。例えば，「戦戦兢兢」から「戦兢兢」，「悲悲切

切」から「悲切切」,「活活潑潑」から「活潑潑」のように約められるが，相互の意味の差異はまったく感じられない点では「鬱鬱葱葱」と「鬱葱」が同じ意味で用いられるのと同様である。

c．二字単語 AB が一つの全体として ABAB 型に重複されたもの。

五分五分　不承不承　是非是非　東西東西

多義語「是非」は，畳語形式の異なるいわゆる AABB 型の「是是非非」[3]と ABAB 型の「是非是非」の二通りの重複形を持っているが，それは「是非」の多品詞性に由来するものである。畳語形式が違うと，それぞれの持つ意味と文法的機能が相違してくる。それについては後述する。

「滅茶滅茶」はこの類に似た構造をしているが,「滅茶」は和語「めちゃ」の音に当てた漢字であるから，本文では対象としない。

ABAB 型畳語が重複して形容詞化接尾辞シを伴い，形容詞を構成することがあるが，該当語は「希有希有し」と「下種下種し」の 2 例しかない。「美美しい」のような二字畳語を構成要素に持つ形容詞が比較的容易に抽出できるが，四字畳語はその語形が長大なため必ずしも造語力は強いものではない。

畳語は同語を重複させることにより，文章に強い表現力を与える機能があるので，多くの文学作品に登場する。二葉亭四迷の『浮雲』[4]では，多種多様の重複形式が使用され，文章に生彩を与えている。辞書[5]に見出せない語も使用されており，特に ABAB 型畳語の多いことが興味深い。辞書にない四字畳語だけを参考までに挙げると，滔滔蕩蕩，丹治丹治，無念無念，無残無残などである。

2．構成要素の機能

日本語の二字漢語の構造については斎賀（1957）[6]の説がよく引用される。斎賀は複合の意味的関係を重視し，二字漢語を並立関係，主述関係，補足関係，修飾関係，補助関係，客体関係の六種類に分けている。次にはその分類方法に従って a 類と c 類畳語の原型である二字漢語を分析してみる。

㈠　並立関係

㈠　同義語・類義語による一義形成

恍惚　渾沌　凄切　戦慄　蹌踉　平坦　磊落

㈡　類義語・対義語の並列対照

平凡　明白　空寂　空漠　洒落　時刻　唯諾　貴重　奇怪

奇妙　年歳　万千　事物　三五　言句　個別　虚実　子孫

是非　朝暮　東西

㈡　主述関係

該当例なし。

㈢　補足関係

該当例なし。

㈣　修飾関係

来世　五分　希有　下種

㈤　補助関係

不承

㈥　客体関係

該当例なし。

a類のAABB型畳語の構成には並列構造の単語の働く可能性が高い。漢語にはこのような類義要素の組み合わせによる構造が大量に存在しており，造語の面では生産的であるのに対して，和語にはあまり多く見当たらない形式である。この点から，四字畳語にはAABB型の漢語畳語が圧倒的に多く，和語にはごく希であるという対照的分布は語構成段階の単語の構造の差に原因していると見てよい。

c類では漢字表記による語例が少ない。漢語は中国語から伝来されたものが多いのは周知の通りであるが，そもそも古代中国語にはABAB型畳語が欠けているのであろうか。畳語は音節が整っていて，音楽性に富んでいるため，よく詩歌などに使われているから，試みに『詩経』⑦を調べてみたところ，数多くの畳語が用いられているのが分かった。今ABAB型四字畳語だけを以下に摘記する。

悠哉悠哉　簡兮簡兮　玼兮玼兮　瑳兮瑳兮　子兮子兮　薄兮薄兮

帰哉帰哉　懐哉懐哉　委蛇委蛇　碩鼠碩鼠　其雨其雨　匪今匪今

伐柯伐柯　曰帰曰帰　采薇采薇　采菽采菽　如何如何

『詩経』ではAABB型畳語が多用される一方，ABAB型畳語も決して少なくはない。では，AABB型畳語の日本語への定着とは反対にABAB型畳語が全く日本語に入っていない理由はどこにあるのであろうか。『詩経』を例に見ると，そこにはリズムをとるためにAA型二字畳語のAの後に助字「兮」「哉」などをつけて「簡兮簡兮」「悠哉悠哉」にするとか，「采薇采薇」のように「述語＋目的語」のものを重複させるとかの工夫をして作られた臨時一語が多いという『詩経』の詩歌集としての性格にも関連があるかもしれないが，日本語が外来語を輸入する角度から考えると，古代中国語を外来語として摂取した場合，まず固有日本語で表現し切れない語を輸入するのが一般的で，やまやま，ぐずぐず，ひろびろなど和語畳語をたくさん有する日本語ではABAB型漢語畳

語の生存できる空間が提供されていないようである。c類のABAB型畳語は『佩文韻府』『漢語大辞典』『辞海』など中国語関係の辞典には見出せることができないところからそれらは和語造語法に起因している可能性が大きいと推測される。

b類のAABB型畳語も類義要素の重ね合わせであり，AAもBBも単独に使用でき，個々独立に意味を有する。その中に，「在在所所，明明赫赫，喋喋喃喃」のような類義語の結合体は，順序には必ずしも拘束されず，前後の位置を変えても意味には影響がないため，同素異順畳語「所所在在，赫赫明明，喃喃喋喋」なども当然存在する。更に「喧喧諤諤」のように「喧喧囂囂」と「侃侃諤諤」の混交によって造出された例も見られる。

この類の畳語の造語成分の中には「喋喋喃喃」の「喋」と「喃」のように重複される前は非独立的で，重複によって初めて一語として働くものがあり，いわば「喋喋」と「喃喃」は分割不可能なものである。そういう意味では，「重複する」ことは独立化のための重要な文法的手段の一つであると言えるであろう。

二．意味・機能上の働き

重複に際して，畳語とその成分との間になんらかの差異が窺われるが，成分が一義ではなく，多義の場合は普通一義に限って重複されることになる。

(1)　そしてこれも，東海の雄にのしあがってきていた家康と，虚々実々の攻防をくりひろげる。　[杉本苑子・決断のとき]

「虚実」の項目には「①無いこととあること。空虚と充実。②うそとまこと。③防備の有無。種々の策略を用いること。」とあり，その重複形式「虚虚実実」は③の意味での重複と考えられる。

「是非」のように「是是非非」と「是非是非」の二通りの重複形を持つ多義語も見られるが，重複の仕方の差によってそれぞれ意味が違ってくる。

(2)　彼の気質の中には政治家の泣き言の意味でない本来の意味の是々非々の態度を示さうとする傾向があった。　[太宰治・ロマネスク]

(3)　私はこれから金の才覚，是非是非都合をするほどに，気を丈夫にもっておいでヨ。　[人情本・英対暖語]

(4)　お帰りに是非一寸でいいからお寄り下さるやうにといふ事です。　[永井荷風・腕くらべ]

と例文にあるように「是是非非」は名詞で，格助詞「の」を伴い，後の「態度」を連体修飾しているが，「是非是非」の場合は「是非」自体がすでに副詞として機能している

ことが明らかであり，例(3)と例(4)を比べて分かるように重複されていても構文上，意味上ほとんど差が見られず，ニューアンスの強化になるにすぎない。

四字畳語の構成要素を品詞別に見ていくと，名詞，形容動詞（便宜上，形容動詞を含む多品詞語を形容動詞として一括して扱う），副詞，感動詞が見られる。

名詞の重複については，玉村（1986年[8]）にすでに「畳語化によって当該名詞成分が「数」の無標状態から有標に転ずる場合が多い」と指摘され，個別指示，複数指示，多数指示，総数指示の四種類が挙げられた。その分類に基づき，四字畳語を分析すると，次のようになる。

i．個別指示（毎～，各～，～ごと）

朝朝暮暮　時時刻刻　年年歳歳　言言句句　生生世世　子子孫孫

念念刻刻　個個別別　来来世世

ii．複数指示（二つ以上の～）

三三五五

iii．多数指示（多くの～）

万万千千　林林総総　処処方方　在在所所

iv．総数指示（すべての～）

事事物物

四字畳語という限定された範囲内で，本来明確な数量概念を持つ数量名詞「三三五五」と「万万千千」には数の有標化が認めにくいかもしれないが，「時時刻刻」「処処方方」のように強くそれが意識される語例が絶対多数を占めていることに注目したい。文の中で具体的に複数指示で働くか，多数指示で機能するかは，用いられるその場の状況によるところが多く，はっきりと決められない場合があり，ここではどの意味に傾くかという傾向性を示すにとどめたい。個別指示と総数指示の場合では両者は全く関連性のないものではなく，周偏意義に対する違う角度からの表現であり，前者は「年々歳々，等しき季節は来る也」（国木田独歩・欺かざるの記）に見られるように，「毎年毎年，年毎に」という個別性に着目するのに対して，後者は総括性に傾くと言える。

重複形によって強調を示すのは四字畳語の主な特徴である。品詞面から見ると，形容動詞の重複は圧倒的に多いが，普通の形容動詞とは違い，それ自身が程度強化の働きを持っているので，「大変，とても」など程度副詞の修飾を受けないのが普通である。形容動詞の重複は原型 AB から AABB 型に重ねられたもの，AB から ABAB 型に重複されたものと二字畳語 AA と BB が結合して AABB 型に組み合わせられたもの，の三類にまとめられる。いずれにおいても意味上の変化は大きくなく，文法的意義と文法的機

能の面で些少の差が見られるだけである。

(5) 確証は，筆端に顕るる所の語気を見て明々白々たり。［福沢諭吉・文明論之概略］

(5′) こんな明白なのは即座に校長が処分して仕舞へばいいに。

［夏目漱石・坊っちゃん］

(6) 真実に聞いて呉れた人は君くらゐのものだ。町の人なぞは空々寂々—いや，実際，耳を持たないんだからねえ。［島崎藤村・破戒］

(6′) 丑松はあの寺の古壁を思ひやるごとに，空寂なうちにも血の湧くやうな心地に帰るのであった。［島崎藤村・破戒］

「明白」と「明明白白」は共に「はっきりとして疑わしいところが全くないさま」であり，「空寂」と「空空寂寂」とは大体同様の意味を持っているが，「明白」「空寂」が客観的な叙述であるのと異なり，「明明白白」「空空寂寂」は成分の基本的意義を保ちながら，感情価値が高まり，その客観叙述に対する主観的評価の働きが加わり，文章に生き生きとした色彩を与えている。

以上では AB から AABB 型に重ねられた畳語の用例を見たが，ABAB 型畳語と二字畳語でできた AABB 型畳語にも強調の働きが反映しており，畳語になる前より表現力が強くなることが観察される。

(7) ふとしたことでわたしが筆を執って，事の必要なる理由を論じて，喋々喃々数千言。［福沢諭吉・福翁自伝］

(8) 洋燈カンカンと輝く下には，八九歳より十二三歳に至る少年少女二十余名打ち集ひて喧々囂々，［木下尚江・火の柱］

(9) この感じさえ引き抜くと，余るところは皎々冽々たる空霊の気だけになる。

［夏目漱石・吾輩は猫である］

(10) 不承不承に五十銭取って仕舞ッてネ。［二葉亭四迷・浮雲］

(11) 講釈だか芝居のせりふだか不解寐言で，罪を五分五分に仕やうとはむしがいいぜ。

［人情本・春色梅美婦禰］

その他の品詞の重複としては，副詞の重複「是非是非」と感動詞の重複「東西東西」がそれぞれ一例しか見当たらず，強調を表す点では形容動詞などとの共通性が窺われる。

(12) とうざいとうざい。やかましいわへ。［山東京伝・孔子縞于時藍染］

(13) もちっとじゃ，東西東西立つまいぞ。［雑俳・神酒の口］

三．構文上の働き

単語が独立に文法的役目を果たすことができるのは言うまでもないが，語義，語法の

面では重複形式でないと表現できないものがある。換言すれば，重複形式は成分だけでは実現できない働きをすることができる。

(14)　櫓を環る三々五々の建物には厩もある。　[夏目漱石・幻影の盾]

(15)　一同は，ほっと吐息して席を立つと，三々五々，退出していた。

[子母沢寛・勝海舟]

(16)　それ知られては行くも憂し行ぬも憂しと肚裡は一上一下虚々実々，発矢の二三十も列べて闘ひたれど，　[斎藤緑雨・かくれんぼ]

(17)　言々句々，厳しく鍛錬され，詠ずる対象の真髄をよくとらえて，

[中山義秀・芭蕉庵桃青]

(17′)　専門の学者でなければ分からぬやうな言句を使はぬやうになったのもこの時代である。　[夏目漱石・文学評論]

数量名詞「二」「三」「千」「万」等はそれだけで文法上の役割を果たすことは極めて困難であり，「三個」「五人」のように熟語を作るか，「三三五五」「万万千千」のような重複形式を取るかなどの手続を経て機能するのが普通である。「三五」は重複されることにより，例(14)のように後の体言を修飾するだけでなく，例(15)のように後項の動詞を修飾することができるようになり，重複により成分の持たなかった働きを持つようになっている。例(16)は文中に「一上一下」の四字熟語が用いられているため，そのリズムに合わせるには二字の「虚実」では不自然で，その重複形式「虚虚実実」を使わなければならなかったと考えられる。例(17)は文における位置から「言言句句」が選択され，「言句」は単独に文の最初に現れるのが許されないので，例(17′)に見られるようにその前に修飾語を付けることが要求される。

重複の形式から見ると，AABB 型畳語と ABAB 型畳語とは文中における文法的機能において差異が認められるのである。AABB 型畳語はほとんどの文法的位置に立つことができるが，ABAB 型畳語は主に修飾関係の位置に限られる。

(18)　何にもぶつからずに，空々漠々の心細さを続けているなど，

[丹羽文雄・厭がらせの年齢]

(19)　笑ふでもなく笑はぬでもなく，不思議さうな剣呑さうな奇々妙々な顔色をする。

[二葉亭四迷・浮雲]

(20)　たいていは空々漠々とした思考にふけってゐたのだが，　[里見弴・今年竹]

AABB 型畳語は上の 3 例のように「の」「な」「とした」を伴い，それらの用法により連体修飾の働きをすることができる。

(21)　恍々惚々として其来所を知るに由しなしとはいへど，　[二葉亭四迷・浮雲]

（22） しかし，出産の直後という立派な理由があるのだから，正々堂々と寝ていてもいいはずだった。 ［武田泰淳・森と湖のまつり］

（23） 朝に夕に，時々刻々に変化するその相貌に心行くまで親しむことができたのは… ［谷崎潤一郎・細雪］

（24） 喉頭の筋を張り侃々諤々抗議するよりも，引退の態を示してその志を伸ぶるを， ［中江兆民・兆民文集］

格助詞「の」などを伴って連体修飾語となるが，以上の例に見られるように連用修飾語になる場合が多い。「に」「と」「として」などを後接して機能を果たす場合もあるが，例(24)のように格助詞などの力に頼らずそのままの形で連用修飾語になる点を見ると，副詞への展開が畳語形に付随していると考えられる。

（25） 事々物々，必ずその故ありて生ず。 ［三宅雪嶺・我観小景］

（26） 児玉の言々句々，肺腑より出で，其顔には熱誠の色動いて居るのを見て， ［国木田独歩・日の出］

（27） 我知らず，想像上の新治のこうした場合の正々堂々さを模倣してゐたのである。 ［三島由紀夫・潮騒］

（28） 笑ふ時は八重歯の見えるのが妙に誘惑的だった。然し，済してゐると，如何にも平々凡々だった。 ［志賀直哉・暗夜行路］

（29） 武士道により死んだものは，子々孫々末代に及んで，その家栄ゆるの制がある。 ［子母沢寛・勝海舟］

AABB 型畳語が主語になり，他語からの修飾も受けられるというのは例(25)(26)の通りである。それ以外，述語になるものと，「さ」の作用により名詞化されて目的語になるものなど，ABAB 型畳語では表現できない働きを担っている。また，例(29)のように AABB 型畳語が更に他の熟語と合体して補語として働いているものも見られる。

ABAB 型畳語の用例を見ると，主に連体修飾と連用修飾の働きをするものであるが，例(33)の「東西東西」は感動詞の本来の性格から間投作用を果たしている。

（30） どっちらも五分五分のこぢつけだネ。 ［滑稽本・浮世風呂］

（31） 日頃はここなをなごと，言ひ事，小言が絶へね共，五分五分に聞いて居た。 ［浄瑠璃・卯月の紅葉］

（32） 不精不精に承諾する。 ［森鷗外・藤鞆絵］

（33） 東西東西，アア，折角出たものを， ［滑稽本・浮世風呂］

おわりに

四字畳語に様態を表す形容動詞の重複が最も多く，以下名詞の重複，副詞の重複，感動詞の重複の順になっている。名詞の重複は意味上主に数の有標化を表すが，それ以外のものの重複は意味上では根本的な違いがなく，ニューアンスの深化，強調など文法上，心理上の働きをしていると見られる。又，重複形式によって構文上の機能が相違する場合のあることもわかった。四字畳語はあくまでも漢語畳語の一類型に過ぎないが，二字畳語，三字畳語と合わせて考える必要があり，日本語における漢語畳語の全貌をひきつづき追究していきたい。

注

① 山田孝雄『日本文法学概論』594ページ（宝文館　1936）より引用。

② AABB 型畳語の用例は次の文献による。『永井荷風集』『島崎藤村集』『丹羽文雄・岡本かの子集』『志賀直哉集』『徳冨蘆花・木下尚江集』（以上，現代日本文学大系）『斎藤緑雨集』『中江兆民集』『三宅雪嶺集』（以上，明治文学全集）『森鷗外選集』『二葉亭四迷全集』『漱石全集』（以上，岩波書店）『里見弴全集』『太宰治全集』『武田泰淳全集』（以上，筑摩書房）『三島由紀夫長編全集』『中山義秀全集』（以上，新潮社）『谷崎潤一郎全集』（中央公論社）『福澤全集』（時事新報社）『子母沢寛全集』（講談社）『国木田独歩全集』（学習研究社）

ABAB 型畳語の用例は『日本国語大辞典』によった。

③ 「是是非非」は AABB の形をしているが，他の AABB 型畳語とは違うところがある。それは「旬子修身」の「是是非非，謂之知，非是是非，謂之愚」に由来するもので，「是是」「非非」それぞれは他動詞と目的語の関係（漢語文法にいう「動賓関係」）にあり，普通「是を是として賛成し，非を非として反対する公平な立場で判断すること」の意に用いられる。しかし，それはよく「是是非非の態度」「是是非非主義」のように使用され，他動詞と目的語の関係の意識がすごく薄くなっていると考えられるので，本文では対象とする。

④ 日本近代文学大系第 4 巻『二葉亭四迷集』（角川書店　昭和46）

⑤ 本文で使われた辞書のことをさす。

⑥ 斎賀秀夫「語構成の特質」（『講座現代国語学Ⅱ　ことばの体系』筑摩書房　1957）

⑦ 詩経を調べるには境武男の『詩経全釈』（汲古書院　1984）を使用した。本文に挙げていない AABB 型四字畳語を列挙すると，以下の通りである。

儦儦俟俟	矜矜兢兢	戰戰兢兢	緝緝翩翩	捷捷幡幡	済済跄跄
跄跄済済	芯芯芬芬	穆穆皇皇	兢兢業業	赫赫炎炎	赫赫明明
赫赫業業	綿綿翼翼	皋皋訿訿	烝烝皇皇	実実枚枚	子子孫孫
委委佗佗	嘽嘽焞焞	瀌瀌訿訿	顯顯卬卬	蓁蓁萋萋	雝雝喈喈

⑧ 玉村文郎「古代における和語名詞の畳語について」（『論集日本語研究㈡　歴史編』昭和61）。

主要参考文献

① 新村出編『広辞苑［第四版］』（岩波書店　1997）

② 大槻文彦著『新編大言海』（冨山房　昭和57）
③ 三省堂編集所編『新明解四字熟語辞典』（三省堂　1998）
④ 金田一春彦・池田弥三郎編『学研国語大辞典［第二版］』（学習研究社　昭和63）
⑤ 諸橋轍次著『大漢和辞典［修訂版］』（大修館書店　昭和59～61）
⑥ 山田孝雄他編『現代語・古語新潮国語辞典［第二版］』（新潮社　平成７）

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。第五十一号の締切は一九九九年九月末日、第五十二号の締切は十二月十日厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。採否の問合せには応じられません。